

8月3、4日に参加した今回の研修では、私にとって初めての体験を、数多く行うことができた。それは私にとって大事なものになった。

岩手県釜石市甲子町にある仮設住宅で「仮設で夏祭り」をスローガンとし、「仮設住民とその近隣住民の方々が、相互交流&世代間交流できるようにする」、「仮設住民の方々に心から楽しんでいただき、私たちも楽しみ、心に残る1日にする」、「自治会の方々をはじめ仮設住民と共同して準備を進める」を団体の目的として4月から準備を行った。縁日と聞いて思いつくものを挙げていき、そこからどれが仮設住宅で可能か、また老若男女楽しめるものは何か考え、絞った。4か月と聞くと長く感じるが、全員が同じ時間に集まることは意外にも難しく、企画自体は進むのに問題はなかったが、装飾の面では慌ただしくなってしまう。でも誰も手を抜くことがないところを見て、みんなそれぞれの思いがあって参加していることを感じた。

1日目は開催場所である仮設住宅に着いてすぐに準備を行った。すでに仮設住民の方々が流しそうめんやテントの準備、食材の準備を行っていた。炎天下の中で汗をかきながら声を掛け合って準備を行い、予定よりも早く開始することができた。和柄の折り紙で作った鶴ややっこさんの飾り、画用紙で切り取った提灯で飾られた仮設住宅では初めに流しそうめんが行われ、参加者全員でそうめんを啜った。その後は輪ゴムと割り箸でつくった射的ゲーム、学生の作るたこ焼きやかき氷、チョコレートファウンテンを使った自分で作るチョコバナナが提供され、賑わいを見せた。その頃には少しずつ参加者が増えていた。次に仮設住民の方々と学生による翼をください、明日があるさ、若者たちの合唱の発表、尺八奏者による演奏、そして最後に浴衣を着た学生による、釜石よいさの発表をした。何時間と練習してもぎこちない私たちの踊りよりももっと上手なおばあちゃんがいた。ずっと私は笑顔でいられた。目的の中にあっただけ「私たちも楽しみ、心に残る1日にする」は難なく達成できた。

仮設住民の方々はみなさん笑顔で私たちを招き入れてくださり、祭りの間、私にたくさんのお話を教えてくださった。ここに住んでいる人はもう引っ越した、息子は法政大学出身なの、孫は京都に住んでいる、お兄ちゃんは津波に流された、この前プールの授業があったの、久しぶりに包丁を持ったわ、このワンちゃんかわいいでしょ。私たちと話すことは一緒、でもどこか端々に震災の話もしてくれた。あとから考えると、私たちが話させてしまったのかもしれない。

私にとって初めての岩手県、初めての仮設住宅地で、テレビや新聞で見えてきたものと同じだけど同じじゃない気がした。震災前と震災後を比べることができない私はどこがどう変わったのかわからなかったが、町の色んなところに違和感を見つけることができた。建物の小ささや大きすぎてきれいすぎる道路、たくさん工事現場。たぶん今挙げた目に見えてわかるものだけではないと思う。現地に行って、そこを歩いてみないとわからないことがあることを改めて知ることができた。

2日目は同じ甲子町にある創作農家こすもすさんでボランティアを行った。着いてすぐ

目に留まったのはこすもす公園に隣接する工場の壁に描かれたきれいな壁画だった。震災後に作られたその壁画は暖色を基調とした優しさを感じる画だった。近くで見ると真ん中あたりに線が入っているのに気がついた。その線は津波がきた線らしく、壊してほしいという意見もあったそうだ。それをこんなに素晴らしいものに変えた、それを私は肉眼で見られたことが嬉しかった。ボランティアの内容は材木の移動、草むしり、土の入れ替え。どれも炎天下の中では厳しい作業だったがみんなでわいわい楽しみながら行うことができた。それに、この作業が誰かのためになっていると思うとうれしくてしようがなかった。作業が終わった後に公園内で遊んだ。木製のすべり台やブランコ、手作り展望台にクライミングウォール。どれも楽しくてはしゃいでしまった。こんなにも楽しい遊具を一から作ったことに感動した。こすもすさんではお昼ご飯も頂いた。夏野菜カレーにそうめん、サラダとスイーツ。美味しかったのはもちろん、暑い夏の日に涼しい部屋の中でお昼ごはんを食べたのがなぜか久しぶりに感じて懐かしくて、小学生に戻ったような気分だった。こすもすにいらっしゃる方々はみなさん優しく、この人たちが作ったこの場所だからこんなにも素敵なところになったんだと思った。

この2日間で教わったことは数えられないほどある。釜石の現状を知った、仮設住民の方々の望みを知った、学生が来ることによる利点を知った。自分では実感していないところにもあるような気がする。心のなかの変化だ。

心のなかの変化として挙げられるのは、私は今回の研修で、高校3年生の頃の自分を恥じることを知った。震災に対して決して、軽く見ていたわけではない。ただ、震災が起きて約2年半が過ぎようとした頃、テレビや新聞で見る被災地復興の記事や援助の記事に表向きにはこれからも何か自分にできることをやられなくてはと発言していながら裏では、まだこんなことをやっているのかとあきあきしていた。震災直後、報道によって国内だけではなく海外からも支援が行われていたことを知った。それなのにまだ終わっていないのかと疑っていた。以前、「被災者差別」という言葉を耳にしたが、まさに私はその加害者の状態だった。被災地に関する情報に対して薄く嫌悪感を抱き、頭に入れないようにした。刷り込みでも、なんでもない。誰のせいにもできない、自分で作り上げたものだった。それなのに人の役に立ちたいと思ってこの学部、学科に入学した。自分の思っている人の役に立ちたいという気持ちが薄いものだったと感じさせられながら、この学部で1年間被災地に関する多くのことを教わった。被災地の現状と必要とされているもの。高校3年生の頃の自分とは違う、被災地に興味をもち始め大学2年生になってあの場を訪れて知った、「まだ」ということ。大学に入って座学を学んだだけでは知ったことにはならない。自分の足で現地に行くことでやっと知ったと言えるのではないかと、振り返るとそう思える。

また行きたいと思った。仮設住民の方々のやさしさにまた触れたいと思う気持ちと、これからも何回か足を運んで復興したといえるまで見続けなくてはいけないと思ったからだ。元々あの場所に思い入れがあるわけでも何でもないが、人の役に立ちたいと思う人間として大切なことだと思った。

また、神戸にも行きたいと思った。私の生まれた年に起こった阪神淡路大震災。今までは昔のことだと思っていたが今回の研修でもっと身近なものだと感じ、これから被災地が進んでいく約20年の道の前例として知るべきことだと思う。神戸で上手くいったこと、上手くいかなかったこと、反省点、改善点。どんな人たちがどんなことを行ったのか、どんな人たちがどんなことを怠ったのか。どんな学者がどんな研究をしたのか。データとして扱うのはもちろん、それ以外にも未来への伝達として扱うべきだと思う。

最後に、一緒に研修に行ったスタ学のメンバー、先生、仮設住民の方々、創作農家こすもすのみなさんやそのほかにも関わってくださったすべての人に、学ばせてくれてありがとうございましたと、伝えたい。